



## 運動会で 手榴弾投げ？

大阪高等学校

昭和12(1937)年に相川へ移転してきた大阪高校(当時は日本大学大阪中学校)の創立五十周年記念誌をひもとくと、戦時下の運動会で模擬戦闘がおこなわれ、手榴弾の投てき訓練など、当時の学生の様子を知る貴重な写真を見つけることができる。

# わたしの記憶遺産

目にした風景、忘れられない経験…  
それぞれが今も語る戦争の記憶。

僕は足が長かったから  
馬に乗れて  
言われてね…



二村良介さん(104)

東淀川区内最高齢の二村さんは昭和12(1937)年に大阪城に大本営のある第4師団陸軍の兵隊として朝鮮半島や中国へと渡った。当時26才。「弾薬や食料なんかを運ぶ仕事だったんですが、畑仕事をさせていた馬を連れて行って乗って移動しました。中国では戦闘もあり、死傷した仲間の名前を刻んだズボンのバックルで確認していました」と当時を振り返る。夜中の移動で目印にした北斗七星を今も覚えているのだとか。



夫の姿を一目見たくて  
こっそり訓練を見に行きました



高橋菊江さん(93)

夫の高橋辰之助さん(故人)とは、昭和19(1944)年結婚。戦争の真っ只中だったが日本髪をつけた記念写真だけは撮ったという。が、まもなく夫が召集。「駅まで赤紙(召集令状)を届けに行き、家まで二人で歩いて帰ったのを覚えています」。夫の訓練場所を聞きつけ、一目見たくて駆けつけたこともあった菊江さん。夫は終戦後無事復員した。奉公袋や勲章を今も大切に残している。



京本良子さん(80)

昭和14(1939)年下新庄駅の東側、淡路駅から続いた行列は父の葬送の風景。「中国広東の戦地でマラリアにかかり病死しました。痛い思いをしなかつただけ幸せだったかもしれません」。太平洋戦争開戦直前の戦死で、靖国神社へ合祀される際行われた大祭には昭和天皇のお姿も。また京本さんは東能勢へ疎開中、母とやりとりした手紙などを保管している。そこには厳しくもわが子を導く言葉があった。「私の財産です」。

「お父さん」の  
思い出の写真  
呼んだことも  
覚えていない



岡田匠さん(82)

昭和20(1945)年3月14日に予定されていた大宝国民学校(南区・現中央区)卒業式のため、滋賀の疎開先から6年生だけが心齋橋の自宅へ戻っていたところ3月13日深夜、第1次大阪空襲に遭った。大阪中心街は焼け野原となり御堂筋にはムシロをかけた死体の山が累々と難波まで並んでいたという。防空壕に避難した人々も蒸し焼きで消防団が掘り起こしていた。岡田さんは大阪から逃れた電車の中で同年3月17日の神戸空襲にも遭遇したが奇跡的に助かった。「45人の同級生のうち25人が亡くなり、15人が行方不明になりました」。甚大な被害と混乱のために卒業証書も受け取っておらず、学友との再会が望みという。

せめて、  
学友との  
再会を

「空襲警報は一つれーい」って  
真っ暗な中走り回りました



若林幸代さん(94)

南江口の光照寺で生まれた若林さんは戦時中、配給のお世話や証明書の発行といった村の仕事を手伝っていた。中でも重要だったのは「空襲警報、は一つれーい」とメガホンを持って村をまわる仕事。「(灯火管制で)村中真っ暗で何も見えないけれど、私は勝手を知っているから全然怖くなかったです」。